

水越耕南と清国外交官との文藝交流 —— 1880年代を中心として

柴田 清継, 蔣 海波
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)
(武庫川女子大学共通教育部)

Research on a literary exchange between Mizukoshi Kōnan and some Chinese diplomats under the Qing dynasty in the 1880s

Kiyotsugu Shibata*, Haibo Jiang**

**Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

***School of General Education
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

In this paper we discussed a humanistic exchange of literary thoughts and productions between Mizukoshi Kōnan, a Japanese composer of poems in the Chinese style, and some Chinese diplomats under the Qing Dynasty, including Li Ruqian, Jian Nianxian, Sun Dian and Li Shuchang, in the 1880s. We described several significant aspects of the exchange, compiling the related materials as many as we could.

はじめに

我々は水越耕南(名は成章, 号は畊南とも, 1849-1933年)と清国文人との文藝交流について, 耕南の編に成る『翰墨因縁』(喜多覚蔵・船井政太郎, 1884年12月15日)を主たる資料として研究を行い, その成果の第一作として, 「水越耕南と清国文人との文藝交流—清国駐神戸理事府初代・第二代の外交官を中心として—」¹⁾を發表した。本稿はその第二作になるが, 取り上げる時代の幅を当初の予定より若干変更して, 神戸理事府第三代理事から第六代理事までの時期, すなわち1880年代全体へと拡大した。取り上げる時代の幅が拡大したことにより, 資料は『翰墨因縁』成立以後のものも渉獵した。また, 耕南の交流範囲の広がりに伴い, 叙述の対象は自然, 神戸理事府の外交官のみにとどまらず, 在京の公使や随員にまで及ぶことになった。本稿においても, 第一作に引き続き耕南と清国外交官との文藝交流を中心に検討した。清国の民間文人との交流については, さらに多彩な様相を呈するため, 稿を改めて検討していきたい。

なお, 神戸理事府第八代理事鄭孝胥との文藝交流については, 先般耕南も含めた「神戸, 関西の文人たちとの文藝交流」という形で既に發表した²⁾。時系列から言えば, 本稿に後接するものになる。ご参照を乞う。

1. 第三代理事馬建常・第四代理事黎汝謙との交流

神戸理事府第三代理事馬建常(1840-1939年)は, 字は相伯, 江蘇省鎮江府の人で, 『馬氏文通』で有

名な馬建忠(1844-1900年)の兄であるが、在任期間が1882年4月中旬からの半年足らずと短かったこともあり、耕南との交流を示す資料としては、面会を約束するための書簡一通が『翰墨因縁』(上巻廿九~三十丁)に残っているだけである。近代中国の社会活動家、宗教家として活躍した馬建常については、最近かなり詳しい著作集が刊行されているが³⁾、神戸での事跡については不明なところが依然残っている。その意味ではこの書翰は、馬建常の日本人との交流を示す貴重な資料であろう。なお、『翰墨因縁』がその出身地を「松江府青浦県」としているのは誤りである。

(1) 黎汝謙との交流

黎汝謙(1852-1909年)、字は受生、貴州省貴陽府遵義県の人。後で取り上げる第二代及び第四代公使黎庶昌(1837-1897年)の「従侄」(父の兄弟の孫)に当たる。

さて、当時耕南が「秋思」と題する作を詠み、神戸在勤の外交官や華人の間で高い評価を受け、反響を呼んだ模様である。この作品は、制作時期だけでなく、その詩句も未詳なのであるが、黎汝謙の和詩「和水越畊南秋思原韻」が1882(明治15)年12月25日刊行の『古今詩文詳解』第75号に掲載されている⁴⁾から、遅くともその数ヶ月前までには詠まれていたものということになる。黎汝謙は耕南宛の書簡(日付不明)において「秋思の大作を展読するに、芋綿宛蓄、人をして神移らしむ。東京の詩人にも其の匹を見ること罕なり。然る後に大雅の自ずから真有るを知るなり。拝服拝服。……緩日当に韻に依りて和答し、聊か以て命に報ずべけんのみ」と書き送っている。黎汝謙は神戸着任の前は黎庶昌公使の随員として東京の公使館にいた⁵⁾。彼の詩集である『夷牢溪廬詩鈔』巻三にはその頃の詩作が収録されており、東京在住の文人、加藤桜老(熙)(1811-1884年)、巖谷修(一六)(1834-1905年)、日下部翠雨(鳴鶴)(1838-1922年)らとの交遊のあったことが知られる。耕南の原作をしのぶよすがとして黎汝謙の和詩を掲げておこう。

和水越畊南秋思原韻

華年逝水悵難追	華年 逝水 悵として追ひ難く
独抱幽愁欲訴時	独り幽愁を抱きて 時に訴えんと欲す
昨夜銀河憶秋夢	昨夜 銀河 秋夢を憶い
誰家璧月写新詞	誰が家の璧月か 新詞を写す
虫声断続花含露	虫声断続 花 露を含み
蛩燄高低草蔓池	蛩燄高低 草 池に蔓る
一樣関山人万里	一樣なる関山 人は万里
鬚眉祗覚負男兒	鬚眉祗に覚ゆ 男兒に負くを

このほか、神戸理事府の翻訳官鄭文程の作として「読畊南先生秋思詩次韻、即希教正」(同上巻卅三丁)が、黄超曾(後述)の作として「贈黎孝廉汝謙用水越秋思原韻」と「客窓感賦、再疊秋思韻、録奉畊南司李詞壇雅正」の二首(同上巻四十八~四十九丁)がそれぞれ残っており、また、外交官ではないが、当時神戸にいた華人胡震の作として「和畊南詞兄秋思原韻」(同下巻九丁)が、衛寿金の作として「奉和畊南先生秋思原韻」(同下巻十五丁)がそれぞれ残っている。

黎汝謙は1884年4月21日から24日にかけて京都旅行をした。そのときの事を詠んだ「甲申三月、游嵐山帰、畊南先生有詩紀事、書此報謝」という題の五言三十二句の詩が『翰墨因縁』上巻卅七~卅八丁に載っている。この詩は『夷牢溪廬詩鈔』巻三では「甲申三月廿六日往西京看嵐山…(中略)…水越畊南有詩囑和賦答」という題になっているから、耕南の詩に和したものであるが、残念ながら、耕南の原韻は未詳である⁶⁾。

その他、『夷牢溪廬詩鈔』巻三に癸未(1883年)の作として「日本神戸裁判所判事補水越成章以魚籃觀音像幀囑題」と題する七絶が載っている。魚籃觀音の画幅への題詩を耕南に頼まれて詠んだものである。

黎汝謙にはまた、「読罷新詩未易評、文章秀骨本天成、就中拈出驚人句、始信前賢畏後生(新詩を読み

罷わりて 未だ評し易からず、文章 秀骨 本天成。中んづく人を驚かす句を拈出す、始めて信ず 前賢 後生を畏れしを)を第一首とする「題畊南先生詩刻四絶」(同上卷卅五丁)がある。この「畊南先生詩刻」というのが何を指すのかが問題になろうが、黎汝謙の在任期間から考えれば、1883年11月刊行の『游讀小稿』⁷⁾あたりかと推測される。耕南の著書へのかかわりを挙げるなら、黎汝謙はまた、耕南の嘱に応じ、その評撰に成る『皇朝百家絶句』(本莊輔二・本莊千代平・浜本伊三郎、1885年1月刻成納本)の書名を1884年陰暦閏5月(ほぼ陽暦の6月)に揮毫している。

なお、『翰墨因縁』の序を書いた朝鮮人池運永(1852-1935年)の『香秋山館詩稿』に黎汝謙が神戸在任時の「甲申七月」(1884年8月下旬から9月中旬にかけて)に序を書いており、「朝鮮香秋山館詩稿序」として『夷牢溪廬文鈔』巻一に載っている。耕南の郷土の先輩亀山雲平(1837-1884年)にも「香秋山館集序」⁸⁾があり、その中で池運永と耕南の交遊に触れている。以上により、池運永が黎汝謙と知り合い、序を求めたのも、耕南が仲介の労をとった可能性があり、だとするなら、三者の交遊の中から作られた詩文がほかにもあったかもしれない。

(2) 黄超曾らとの交流

黄超曾(字吟梅)が清国外交使節の正式な随員としてあったのは、王宝平氏の研究⁹⁾によれば、1883年2月2日までである。これから紹介する資料はいずれも黄超曾が外交使節の正式な随員を辞めた後のものなので、本稿のタイトルに当てはまらないが、直前まで外交官であったことと、そのため他の外交官に言及する際にも彼が関わってくること等のため、ここで黄超曾の当時の活動について取り上げることにする。

まず、末尾に日付が「花朝後一日」と記されている書簡(『翰墨因縁』上卷四十三丁)であるが、この日付から1883年3月24日に記されたものと推測される。内容としてはまず原口南村(1840?-1899年)や黎汝謙と連れ立って大観楼¹⁰⁾へ行き、酒を酌み交わしたものの、閣下、すなわち耕南が同席していなかったため、今ひとつ盛り上がらなかったと述べた後、次のような用件を依頼している。

歌雲山館の「潤格」(いわゆる潤筆料の基準)を記した紙があります。衛鏞翁(衛寿金のこと)と相談して取り決めたもので、この前発送しました。活字で二百枚印刷していただきたい。私はこちらの土地に慣れておりませんので、私の代わりに店に渡して、三日以内に完成させてください。手間は直ちに払います。……

当時の滞日清国文人の潤筆料金表の例としては王治本(1835-1908年)とそのいとこ王藩清の「潤筆仿単」がさねとうけいしゅう氏の「王治本の金沢での筆談」¹¹⁾に紹介されている。この時期に黄超曾がわざわざ潤格を印刷に付したのは、まもなく官を辞し、民間の文人として日本を渡り歩いていくための基盤作りの一環だったのだろう。

さて、その後、同年の8月、黄超曾は横浜へと移る。その事は黎汝謙が「癸未七月、黄吟梅詞兄移調横浜差次。…(中略)…率成七律四章、以送別」と題する詩(『翰墨因縁』上卷卅六～卅七丁、『夷牢溪廬詩鈔』巻三)を詠み、黄超曾もこれに和した詩(同上巻五十～五十一丁)を詠んでいることから知られる。横浜到着後、同年の10月3日、黄超曾は耕南宛の手紙をしたためている。手紙にはまず横浜まで二日間の船旅が楽なものだったことを述べた後、次の三点がその主な内容である。

①横浜の理事府の陳允頤理事と意気投合した。閣下(耕南)から頼まれた書簡は陳理事に渡したが、その用件について陳理事は承諾してくれた。また、陳理事は閣下の詩名を慕っており、まだ面会する機会に恵まれないことを残念がっている。

②東京へは二、三度行ってみたが、町が大きく、一度や二度では尽くせない。気力が充実してから、興に乗じて、また行ってみようと思う。

③漢陽先生の職名、住所を教えて欲しい。遠くなければ、訪ねてみたい。漢陽先生にお目にかか

ることができたら、閣下にお目にかかったも同然だ。

①と③について補足しておこう。①陳允頤(1848 または 1849-1899 年)は、字は養元、江蘇省常州府武進県の人で、当時の横浜正理事官である。『翰墨因縁』下巻廿五～廿六丁に載る「畊南司李、始介黄君吟榘、以詩投贈、兼索拙作、碌碌久不報、頃復寄紙属書。為題一絶、不足以答瓊瑤之贖、聊塞盛意而已(畊南司李、始めて黄君吟榘を介して、詩を以て投贈し、兼ねて拙作を索むるも、碌碌として久しく報いず。このごろ復た紙を寄せて書を属す。為に一絶を題するも、以て瓊瑤の贖に答うるに足らず、聊か盛意を塞がんのみ)」と題する下記の詩は、このときの畊南の求めに応じて揮毫したものと見られよう。

海外思聯翰墨縁	海外に聯ねんことを思う	翰墨の縁
君居湊水我神川	君は湊水に居り	我は神川
愧無好句酬佳什	愧ず	好句の佳什に酬ゆる無きを
翹首雲天一惘然	首を雲天に翹げて	一に惘然たり

③漢陽先生とは黄超曾が1882年の3月、時の神戸理事廖錫恩・畊南とともにその家を訪れて唱酬したこともある馬渡漢陽(1851-?年)のことである¹²⁾。その当時、神戸裁判所判事補として畊南と同僚だった漢陽は1883年、すなわち明治「十六年一月判事に陞進し、横浜裁判所八王子支庁長とな」ったとされている¹³⁾が、黄超曾はそこまで細かいことは知らなかったわけである。

なお、黄超曾は横浜への転勤と相前後するころ、畊南の『游讀小稿』所収の一部の詩に評を施し、総評をしたため(1883年7月ごろ)、かつ「江山有助」との題辭を贈っている(同年8月)。

さて、横浜で六ヶ月勤務した後、黄超曾は1884年4月、日本各地における漢詩文の取材と収録の活動に着手する¹⁴⁾。畊南に対しても同年4月10日付の書簡の中で「今後いい作品ができましたら、役所の姚文棟宛送ってくだされば、私に届けてくれます」と書き送っている。姚文棟(1853-1929年)は字は子梁、上海の人、東京の公使館の随員。

2. 第六代理事蹇念咸の時期の交流

第五代理事徐承礼(1884年末から1888年初頭にかけて在任)との交流については、あったかもしれないが、残念ながら資料がないため、触れることができない。

第六代理事蹇念咸(1888年1月初めから1891年2月ごろまで在任)は、高知の詩人三浦一竿(1834-1899年)の『江漁晚唱集』附録によれば、虚甫と号し、貴州の人¹⁵⁾。

『神戸又新日報』明治22(1889)年6月12日号に畊南の「贈中江篤介君」と題する詩¹⁶⁾が載っており、これに対する除広坤と顧厚焜の評が付されている。除広坤は正しくは徐広坤、字は橘孫、江蘇省呉県の人、1884年12月26日から1891年1月29日まで神戸理事府の蹇念咸理事の時の西文通訳官¹⁷⁾。顧厚焜は、字は少軼(逸)、江蘇省元和県の人、1887年、清政府から維新後の「新政」視察の使命を与えられて来日、翌1888年、帰国報告書として『日本新政考』をまとめた人¹⁸⁾。この詩を彼が評するに至った経緯については不明。

同9月8日号所載の畊南の「読清国諸文士布引山唱和之什、爰次原韻」詩には、蹇念咸の評が付されている。顧厚焜らの神戸滞在中のことを詠っているのかもしれない。

同9月11日号所載の畊南の「己丑九月九日〔陰曆中秋〕馬屋原裁判所長駒林別墅觀月宴席上、率賦一律以呈、并乞在座諸君和正」¹⁹⁾詩には、蹇念咸と章伯和が和韻している。まず畊南の原韻は次の通り。

鰕生何幸得叨陪	鰕生何ぞ幸いなる	叨陪するを得たる	
佳節中秋宴正開	佳節中秋	宴正に開く	
林樹無声風乍動	林樹	声無く	風乍ち動き

山河有影月初来	山河 影有り 月初めて来る
今宵誰是梯雲手	今宵 誰か是れ梯雲手
満座人皆折桂才	満座 人皆折桂の才
最羨賢侯清福厚	最も羨む 賢侯 清福厚く
百年占此好楼台	百年 此の好き楼台を占めんことを

これに対する和詩は9月17日号に載っており、蹇念咸の作は「敬和水越畊南中秋賞月原韻」と題するもので、章伯和の作は「捧読畊南先生中秋賞月大作、清新雅潔、愛不忍積、是夕余以他事不及与同署諸君赴山楼飲宴、故無詩、然聆金玉之音朗、秋虫亦当助響、謹歩韻、祈晒正」と題するものである。章伯和の作を挙げておこう。

独坐常呼影作陪	独り坐すれば常に影を呼びて陪を作さしむ
每逢明月笑顔開	明月に逢う毎に 笑顔開く
不同列子乘风去	列子の風に乗りて去りしに同じからず
自有嫦娥為我来	自ら嫦娥の我の為に来る有り
鞅掌域中掄傑士	鞅掌たり 域中 傑士を掄び
太平天外樂凡才	太平なり 天外 凡才を楽しむ
蟾円兩度神山下	蟾円かなること兩度 神山の下
何処簫声弄玉台	何れの処の簫声か玉台に弄づる

章伯和は『江漁晚唱集』附録の記載によれば、寿彝と号し、湖南の人。第五句には「我国今歳正在秋闈取士」という原注があり、第六句と合わせて、自分が官途と無縁な生活を送っている民間人であることを表現している。第七句の内容からして、それまで神戸に足かけ二年は住んでいたと見られる。『江漁晚唱集』附録に一首だけ所載の彼の詩も「秋夜招飲布引富貴楼」と題するもので、神戸と関係している。

3. 東京清国公使館の外交官との交流

黎庶昌(号蕓齋)は第二代(1882年2月中旬から約1年間)と第四代(1888年1月～1891年1月)の二度にわたり公使(正使)を務めた。清国公使やその他の外交官と日本の文人たちとの詩文交流は、既に初代公使何如璋(1838-1891年)の時から結構活発に行われていたが、黎庶昌の代になるとますます盛り上がり、春秋には何度も詩会が催された。詩会で披露された詩文は多く随員の孫点によって詩文集としてまとめられ、刊行された。孫点は字は君異、安徽省来安県の人。1888年1月2日から1891年5月26日まで公使館の随員を務め、任満ちて帰国する途中、海に溺れて37歳で死んだという²⁰⁾。

(1) 孫点との交流

『神戸又新日報』明治22(1889)年3月12日号に「在東京清国公使館 孫点〔君異〕」という作者名で「水越畊南来自神戸、往還兩見、情見乎詞、口占二律、次和大作、並送其婦」と「己丑一月廿又三夜、走送畊南道兄錦旋兵庫、三疊前韻」の都合三首の詩が載っている。

「己丑一月廿又三」日は陽暦の1889年2月22日。この日は黎庶昌が紅葉館で親睦の会を開いた。まず黎庶昌が一律を詠んだが、韻険しくして和することが難しく、参会者5、60人のうち、和する者は少なかった。孫点のみが詩四首を詠み、散会の後も余興なお尽きず、さらに原韻に歩して詩二十首を吟じたため、その文才が黎庶昌や伊藤博文に褒め称えられたという。孫点はその際の自身の詩二十四首と参会者の評跋五十篇を集めて『嚶鳴館春風唱集』というものを編んだ²¹⁾。耕南ははるばる神戸からこの会に駆けつけ、会が終わるや、その日の夜にははや帰途に就いたのであり、また、面会の際に孫点に詩を贈ったわけである。耕南の評は同書に、

豊韻二十四律愈出愈奇. 其神妙之处, 直如葛洪丹井汲用不尽矣(豊韻二十四律 愈いよ出でて愈いよ奇なり. 其の神妙なるの処は、直く葛洪の丹井の汲み用いて尽きざるが如し)〔教弟水越成章 畊南拝読〕

として載っている.

『神戸又新日報』明治22年6月12日号に孫点の「畊南仁兄, 重来東都, 両蒙見訪, 驩然道故, 情見乎辞, 今夜客■造訪傾譚, 又有帰期, 能無惆悵, 偶賦五古, ■得八韻, 詩未足言, 聊以志■, 高明正之, 無任禱幸」²²⁾と題する詩が載っており, その背景や事情は不明だが, 前の上京からあまり日をおかず, 畊南が再び上京し, 孫点のもとを訪ねたことが分かる. その詩とこれに対する畊南の評語を掲げておこう²³⁾.

君自神山来	君 神山より来る
高軒辱枉顧	高軒 枉顧を辱くす
執手話別衷	手を執りて 別衷を話し
深情託毫素	深情 毫素に託す
過門必入室	門を過ぐれば 必ず室に入る
聚談凡兩度	聚談すること凡そ兩度
於礼重往来	礼に於いては往来を重んず
敢遲趨与歩	敢えて趨と歩とを遅くせんや
逆旅敵重門	逆旅 重門を敵き
華燈照夜暮	華燈 夜暮を照らす
従譚忘帰歟	従譚 帰るを忘れん
交權從此固	交權 此れより固からん
臨岐重躊躇	岐に臨んで重ねて躊躇す
新詩可無賦	新詩 賦すること無かる可けんや
明発理帰舟	明 <small>あした</small> に発せんとして 帰舟を理め
黯然望雲樹	黯然として雲樹を望む

水越畊南評, 孫君才横溢, 所謂筆力揮千里者, 今如此作, 座間咄嗟所成, 而猶其措辞平易, 叙情真挚, 亦非凡才可企及也(孫君は才横溢し, 所謂筆力 千里に揮う者なり. 今 此の作の如きは, 座間 咄嗟に成れる所なるも, 而も猶お其の措辞平易にして, 叙情真挚なり. 亦凡才の企及す可きに非ざるなり).

(2) 黎庶昌との交流

上述の孫点の「豊韻二十四律」に対する評も, その詩会がもともと黎庶昌公使の主宰したものであった点で, 畊南と黎庶昌との交流と言えなくもないが, ただ間接的である. では, 直接的な交流は如何ということになるが, それはどうやら須磨から始まったようなのである. 『神戸又新日報』明治23(1890)年9月9日号に黎庶昌と畊南, 鄭文程の唱和詩が掲載されている. 黎庶昌の作のうちの一首は「須磨海浜保養院得晤水越君, 喜而有作, 兼簡奈良土屋弘」と題するものである.

水越成章土屋弘	水越成章 土屋弘
八年前已 ²⁴⁾ 稔時名	八年前已に時名を稔りぬ
江都英彦皆吾識	江都の英彦は皆吾識れり
紅葉詩編待子賡	紅葉の詩編は子が賡するを待たん
神戸山川兵庫客	神戸の山川 兵庫の客
須磨雲海奈良城	須磨の雲海 奈良の城

此行不数清游快 此の行は清游の快きに数えざるも
且喜文縁接両生 且く喜ぶ 文縁の接がりて両つながら生ぜるを

土屋弘(1841-1926年)、号は鳳洲、この当時は奈良県師範の校長を務めていた²⁵⁾。須磨海浜保養院とは、1889年5月に須磨浦療病院の近く、一の谷の古戦場跡に竣工した「貸別荘」、今風に言えば「ヘルスセンター」で、浴槽男女二室のほか、楼閣八基が古松鬱鬱たるの間に聳えていた。日清戦争の従軍記者を務めていた正岡子規も、途中で帰国後、療養のためここに滞在したことがあるという²⁶⁾。第二句にあるように、黎庶昌が8年前から耕南らの名前を知っていたということは、最初の来日早々ということである。黎庶昌は1890年の8月から9月ごろにかけて奈良及び新宮を訪れたことが資料によって知られる²⁷⁾ので、須磨保養院滞在はその前か後であったろうと推測される。保養院で保養したのであるから、第七句の表現にもあるように、何らかの身心の不調があったことにならうか。もう一首は「席上口占、率呈水越畊南一粲」と題するもので、下記の通り。

遽従保養須磨地 遽かに保養に従う 須磨の地
邂逅詩人水越章 邂逅す 詩人水越章
一曲清歌紅袖舞 一曲の清歌 紅袖舞う
海天風月意何長 海天の風月 意何ぞ長き

藝者遊びもしていたのだから、さほど重い病気ではなかったのだらうと思われるが、さて、耕南はこの詩に次韻して、次の二首を詠んでいる。

次韻奉呈黎星使
海外大名推泰斗 海外 大いに名あり 泰斗と推す
杲然報国有文章 杲然として国に報い 文章有り
疎狂何幸陪筵末 疎狂 何ぞ幸いなる 筵末に陪する
始慰十年瞻仰長 始めて慰む 十年瞻仰すること長かりしを
又用前韻
何料皇華到此鄉 何ぞ料らん 皇華 此の郷に到らんとは
不妨花月入平章 妨げず 花月を平章に入れること
留将村雨松風跡 村雨松風の跡を留めて
一曲清歌引興長 一曲の清歌 興を引きて長し

原注に「此日侍妓三本松首奏村雨松風事一曲」とあるように、藝者が須磨に伝わる在原行平と松風・村雨の物語を謡って興を添えたのであろう。なお、鄭文程も「次和奉呈黎星使」と題する詩を残している。

さて、黎庶昌の上引の「須磨海浜保養院～」の詩の第四句、すなわち紅葉の詩編にあなたが唱和してくださるのをお待ちしますというメッセージが、次に述べる事柄につながっていくのである。黎庶昌の任期満了も近づいた1890年の重陽節(陽暦では10月22日)、また紅葉館で詩会が催された。そのときの作品も例によって孫点の手で『庚寅讌集三編』(1890年序、刊)登高集として纏められたのだが、その『庚寅讌集三編』の附録に、

会后水越耕南自神戸寄詩。亀谷省軒為其友，交稿。…(中略)…未便棄而不録，附録於後，以餉同好。(会后 水越耕南 神戸より詩を寄す。亀谷省軒 其の友たり，稿を交す。…(中略)…未だ棄てて録せざるに便ならず，後に附録して，以て同好に餉せん。)

として、耕南の詩二首が収載されている。すなわち、耕南は会に直接参加するのではなく(遠方という

(柴田, 蔣)

こともあり、参加できなかったのだろう)、事後に自作の詩を郵送し、亀谷省軒(1838-1913年)²⁸⁾を介して届け、黎庶昌との約束を果たしたのである。その詩は下記の通り²⁹⁾。

庚寅重九日奉寄黎星使蕓齋先生及在節署諸君、並乞教正
憶曾陪侍使君驂 憶う 曾て陪侍せり 使君の驂
赤浦烟波許共探 赤浦の烟波 共に探るを許せり
千里関河愁裏絶 千里の関河 愁裏に絶え
滿城風雨夢中諳 滿城の風雨 夢中に諳んず
由来儒雅推賢七 由来 儒雅は賢七を推す
不怪詞源倒峽三 怪しまず 詞源 峽三を倒にするを
今日登高奠酒会 今日 登高 奠酒の会
可能一念及畊南 一たび念いて畊南に及ぶこと可能なりや³⁰⁾

奉読黎星使重九日芝山雅会大作、爰次原韻、以寄呈、兼送錦旋
人事変遷滄与桑 人事変遷 滄と桑と
不如同举菊花觴 如かず 同に菊花の觴を挙げんには
久将威徳留他域 久しく威徳をば他域に留めたり
応有声名動洛陽 応に声名の洛陽を動かす有るべし
白酒此時傷遠別 白酒 此の時 遠く別るるを傷み
青山何処托深臧 青山 何れの処にか 深く臧するを托せん
秋風猶作甘棠看 秋風 猶お甘棠と作して看ん
珍重東籬一段黄 珍重せよ 東籬一段黄なり

第二首については黎庶昌の原韻も掲げておこう。

庚寅九月九日芝山紅葉館修登高約、兼為留別之会、賦呈二律、希諸大雅吟壇和政
暉暉夕照映扶桑 暉暉たる夕照 扶桑に映じ
此日芝山又举觴 此の日 芝山に又觴を挙ぐ
駐我忝持双使節 我を駐めて 忝くも持す 双使節
登高曾賦六重陽〔余毎歳必為此会〕 高きに登りて 曾て賦せり 六重陽
同文歴劫終難廢 同文 劫を歴るは 終に廢し難く
与国論心実易臧 与国 心を論ずるは 実に臧り易し
嘉会不常須尽醉 嘉会は常ならず 須く酔いを尽くすべし
勸君休負菊花黄 君に勸む 負く休かれ 菊花の黄なるに

むすびにかえて

以上、本稿では1880年代の水越耕南と清国外交官との文藝交流の様相を追跡してきた。耕南30代前半から40歳頃にかけての時期であり、また、日中両国の関係も険悪な状況を呈することはそれほど多くなかった時期である。そうした背景の下、本稿で取り上げた文藝交流の種々相には友好的な雰囲気漂っているものが多い。

耕南の編に成る『翰墨因縁』の読解・整理をきっかけとして始めた耕南と清国文人との文藝交流についての研究であるが、実はようやくその折り返し点までたどり着いたところである。民間文人との交流状況の解明が今後の課題として残っている。

なお、今回扱った時期の清国人に、その名前から見て蹇念咸の兄弟ではないかと思われる人物蹇念恒

があり、念恒も耕南と詩の唱和をしているので、ここで一言しておきたい。

蹇念恒について知ることのできる資料は多くないが、黎庶昌が1889年3月23日に東京芝公園の紅葉館で開催した「己丑讌集」に参加しており、『己丑讌集続編』に蹇念恒の詠んだ詩が一首収録されている。それは「黎蕤齋媼丈招宴東都文士於紅葉館，念恒適來遊東京，猶陪末座，即席賦呈，兼乞諸公莞政。〔遵義〕蹇念恒〔仲常〕」として掲載されており、これにより、蹇念恒が黎庶昌の姻戚で、たまたま東京に来遊していたため、この宴に参加することになったことが知られる。また、黎庶昌の姻戚であれば当然ということになるが、蹇念咸と同じく貴州の人であることも知られる。一方、このときの孫点の作に「遵義蹇茂才仲常自黔入都，紆道來遊，適與斯會，有詩見眎，次韻奉贈，且送遠行」と題するものがあり、この題から蹇念恒が貴州の遵義から北京を経た上で、東京にやって来たこと、そしてこの後、東京を去ってどこかへ「遠行」する予定であったことが知られる。最終的な行き先は、後で詩題を掲げる蹇念恒の詩の一つ「席散再次韻賦謝」の原注に「予擬四月帰国故云」とあることから、祖国中国であったと考えられるが、その前に神戸に立ち寄ったことが、『嚶鳴館春風暈唱集』に蹇念恒が寄せた序の末尾が「光緒十五年四月立夏前二日，遵義蹇念恒仲常拜謁於日本神戸理事公署」と締めくくられていることによって知られる。すなわち1889年陽暦5月の初めには神戸理事府に身を寄せていたわけで、これは多分兄弟の念咸を頼ってのことだったのではないかと想像されるのである。

蹇念恒が耕南と唱和した詩は『神戸又新日報』明治22年4月12日号と5月5日号に掲載されているが、ここではその題だけ示しておくことにする。

『神戸又新日報』明治22年4月20日号：畊南「奉贈清国秀才蹇仲常先生」，仲常蹇念恒「畊南先生以詩見贈依韻奉酬録呈郢正」

同明治22年5月5日号：畊南「乙丑四月廿五日与清国蹇仲常・夏子猷二秀才同飲於兵庫音羽楼」，蹇仲常「水越畊南招飲酒楼，首賦絶句，依韻奉和」，夏子猷「席間歩韻」，畊南「又■一絶」，畊南「有藝妓乍自隣楼來侑酒，因又疊前韻」，仲常「席間戲改前句」，子猷「又疊前韻」，仲常「席散再次韻賦謝」，蹇仲常「昨歩和一章，意未尽，再疊前韻奉贈畊南先生，莞正」，水越耕南「再呈仲常先生，又用前韻」³¹⁾

注

- 1) 『日本語日本文学論叢』第五号，2010年。
- 2) 「鄭孝胥と神戸，関西の文人たちとの文藝交流」、『武庫川国文』第74号，2010年。
- 3) 朱維錚主編『馬相伯集』（復旦大学出版社，1996年）。
- 4) 『翰墨因縁』上巻卅四丁にも。
- 5) 王宝平「清末駐日外交使節名録」，浙江大学日本文化研究所編『中日関係史論考』（2001年）所収。
- 6) 蔣海波「明治前期東亜文化交流の一側面——漢詩人水越耕南の交友を中心に——」（関西文化研究叢書12『東アジア三国の文化—受容と融合—』，2009年）58頁に「一八八四（甲申，明治十七，光緒十）年三月，黎汝謙嵐山に遊ぶ，水越耕南同行」と記したが、「三月」は「四月」の誤りであり，また，耕南がこのときの黎の旅に同行したか否かは不明であるので，この点も訂正したい。
- 7) 同年7月中旬から1ヶ月足らずの間の讃岐旅行中に詠んだ詩を集めたもの。
- 8) 『古今詩文詳解』第161集，明治18年5月15日，9～12頁。『神戸又新日報』明治19年6月24日。
- 9) 前掲王宝平「清末駐日外交使節名録」。
- 10) 大観楼は，倉本雄三（号樸山）の1886年作の詩に「神戸諏訪山大観楼…」と題するものがある（『樸山詩存』巻之下，倉本雄三著作兼発行，1889年）ことからして，当時神戸諏訪山にあった料亭であろう。
- 11) さねとうけいしゅう『近代日中交渉史話』（春秋社，1973年）所収。
- 12) 前掲拙稿「水越耕南と清国文人との文藝交流——清国駐神戸理事府初代・第二代の外交官を中心として」。
- 13) 笠原広『在京佐賀の代表的人物』（喜文堂，1918年）「馬渡俊猷君」の条による。

- 14) 前掲蔣海波「明治前期東亞文化交流の一側面——漢詩人水越耕南の交友を中心に」61頁。
- 15) なぜ神戸理事府の外交官のことが高知の詩人の著作に出てくるのか。興味深い問題であり、今後この問題をめぐって専論を執筆するつもりであるが、差し当たり中村忠行氏の「胡鉄梅」札記——清末の画家と土佐の詩人達——」（『甲南国文』第35号、1988年）に多少論及されているので、参照されたい。
- 16) 中江篤介は言うまでもなく中江兆民(1847-1901年)のこと。詩は冒頭に「曾向江湖作逐臣，風塵難累自由身」とあり、兆民が前年、すなわち1888年に保安条例により追放された事も踏まえる。耕南と兆民とのかかわりについては今後もう少し詳しく触れる機会をもちたい。
- 17) 王宝平「甲午戦前中国駐日翻訳官考」、『日語学習と研究』2007年第5期。
- 18) 王勇「中国史のなかの日本像」247頁、農山漁村文科協会、2000年。佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』、東京大学出版会、2000年。
- 19) 資料原文の小字は〔 〕をつけて引用することにする。駒林は現神戸市長田区の地名。
- 20) 王宝平主編『中日詩文交流集』（上海古籍出版社出版・発行、2004年）所収の王宝平「前言：試論清末中日詩文往来」8～10頁。前掲王宝平「清末駐日外交使節名録」。
- 21) 前掲王宝平主編『中日詩文交流集』所収の王宝平「《嚶鳴館春風暈唱集》解題」。
- 22) 『神戸又新日報』は神戸市文書館所蔵の複写資料を利用したが、不鮮明で判読しがたい文字があり、それらは■で示した。以下同じ。
- 23) なお、王宝平氏によれば、孫点の残した『夢梅華館海外唱酬録』等の稿本から、耕南を含む日本の詩人たちとの交流の状況がうかがえるとのことである（前掲王宝平「前言：試論清末中日詩文往来」）が、いずれも中国国内の図書館所蔵のものであるため、まだ見ることができていない。
- 24) 「己」とあるが、「巳」の誤りと見る。
- 25) 南摩綱紀「土屋鳳洲伝」。土屋弘『晚晴樓文鈔』二編附載下（五本直次郎、1901年）所収。
- 26) 折田年秀『五峰小稿』（折田年秀、1895年）所収「春夜聞雨」詩原注（44丁）、森貞雄『須磨浦療病院史』（『歴史と神戸』第4巻第2号、1965年5月15日）。
- 27) 1890年の重陽節（10月22日）に紅葉館で唱酬された詩を集めて編まれた『庚寅讌集三編』（孫点編）の「登高集」に黎庶昌の「初秋自奈良至新宮訪徐福墓絶句十二首」が録されており、また、黎は「訪徐福墓」と題する文章（『旧小説』十七 己集二所収）を著しており、その末尾に「光緒十六年八月帰後十日記」とある。「光緒十六年八月」は1890年9月14日から10月13日までに相当する。
- 28) 『神戸新報』明治15年（1882年）4月19日号に亀谷省軒の「奉贈水越耕南君」と題する詩が載っており、遅くともこの頃から両人の付き合いのあったことが知られる。
- 29) 耕南の詩はいずれも『神戸又新日報』明治23年11月12日号にも載っている。主として題に多少の字句の異同がある。なお、余談だが、『神戸又新日報』明治23年10月30日号には黎庶昌の「余与吉川愛洲君不相識，君自播磨枉詩見贈，遂步瑤韻奉答」五律〔余已任滿行将帰国〕と題する詩、蹇念咸の「秋日次吉川愛洲見寄原韻，并希晒正」と題する詩、及び吉川愛洲の謝辞が載っている。どのような事情があったかは不明だが、地方の詩人もなおざりにしない黎庶昌の人柄の表れであろうか。
- 30) 第2句の「赤浦」は明石の浦のこと。第6句は杜甫が「醉歌行」において従姪の勤の文章の力をたたえた「詞源倒流三峡水」の句を下敷きにした表現。
- 31) 夏子猷という人物については未詳。

【中文提要】“水越耕南與清國外交官的文藝交流——以1880年代爲中心”

在這篇論文中，我們盡量收集了有關資料，以1880年代爲中心，詳細地描繪了水越耕南與黎汝謙、蹇念咸、孫点、黎庶昌等清國外交官之間文藝交流的狀況。